

フィンランド・メソッドを用いた 小学校国語科活用学習の授業開発

蛸谷みさ・田中博之

1. 研究の背景と問題意識

小学校教諭である筆者は、近年、子どもたちと学校生活を共にする中で、現在の子どもたちのコミュニケーション能力の乏しさを日々痛感している。コミュニケーションの土台となる思考力・判断力・表現力といった力が足りないために、様々な問題が子ども達の生活に生じている。例えば、日常のほとんどのトラブルは、子どもたちの不適切な言葉づかいや語彙の貧困さ、また、状況を判断する力や相手を思いやる想像力の欠如、さらに自ら考えようとしないう習慣にあると感じることが多い。

そのため、学校において子どもたちの言葉の力を育てることが急務であると考え、本実践を開発した。

言葉の力は社会生活を行う上で大切なものであることは言うまでもなく、従来の国語教育でも、言葉の力を育てる研究は重ねられてきた。例えば、小森(2002)は、すでに平成14年度から実施された新教育課程に即した国語科授業の指針として、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「漢字指導」「書写指導」の指導原則を提案している。また、二瓶ら(2009)は、小学校の国語科教科書の単元に沿って、子どもの言語活動の生活化をねらいとした指導原則を具体的に提案している。

しかし、最近の子どもたちを見ていると、知識としては理解していても、実際の生活場面では、その知識が活用されていないのが現状である。つまり、テストに出てくる問題は正解できても、実際の生活面にその言語力が活かせていない場合が多いのである。例えば、手紙の書き方と意義を学んでそれを理解していても、実際に手紙を書くときに、自分の思いを書くことができないとか、「いじめはいけない。」と口で答えることはできても、相手を攻撃する言葉を使ってしまい、友達関係を築くことが出来ずにトラブルを繰り返すといった現状がある。

そこで、学んだ知識・技能を活用させて、子どもたちが主体的に考えて問題を解決したり、創作表現したりする活用学習のあり方について実践を通して研究し、子どもたちを取り巻く言語活動の充実を図り、言葉の力の不足からくる子ども間のトラブルの軽減に役立てる必要があるといえる。この点は、学校教育法や現行の新しい学習指導要領において、「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、

主体的に学習に取り組む態度を養う」と規定されていることから、その重要性が明らかである。

その際に、北川（2005）によって、活用型学力である思考力・判断力・表現力の育成に有効であるとされているフィンランド・メソッドを援用した活用学習の授業実践を開発することをねらいとする。

2. 研究の目的と方法

現在の日本の子どもたちに不足している言葉の力を育成するためには、どのような活用学習の展開を行えばよいのかを実際の授業を通して具体的に検証する。

研究方法としては、①文献研究による先行研究の概観、②実際の授業（研究授業）における検証、③アンケート分析という段階を踏んで研究を進めていく。アンケート分析については、読解力アンケート（1回目は2011年10月、2回目は2012年3月に実施して、それらの結果を比較・考察する）を用いて子どもに4件法で回答させる。その結果を分析、考察し、さらに、授業による検証を経て、活用学習の授業構成のあり方を把握したい。読解力アンケートは、PISA型読解力の項目やフィンランド・メソッドを参考にして、子どもたちの日常の言語活動を振り返って、その興味・関心の程度や技能・表現の程度、および学習の進め方についての学習成果がわかるように作成する。

なお、研究授業の実施校は、大阪府A小学校4年A組である。授業者は、本論文の共著者である蛭谷みさ教諭（教諭歴30年）である。研究授業の実施年度は、2011年度である。

フィンランド・メソッドについては、まず、PISA型読解力世界一というフィンランドの教育を紹介した北川達夫（2005）や、フィンランドの教科書を作成したメルヴィ・ヴァレ先生の教育手法を紹介した、本論文の共著者である田中（2008）の文献からフィンランド・メソッドを詳しく学び、フィンランドではどのような教育が行われているのかを把握して、本研究の授業開発に生かす。

それを踏まえて、今の日本の子どもたちのために、今後どのような授業改善が行われるべきかを考える。特に、言語活動の充実を図りながら、国語科で習得した既習事項やスキルを活用させて、社会科の学習や総合的な学習の時間と関わらせながら、それらを実際に生きて働く力として身に付けさせるための活用学習の方法と展開のあり方について、実際に授業展開し、実践研究していくことで、具体的に明らかにしたい。

3. 活用学習と言語活動の充実に関する先行研究の整理

はじめに、研究課題の柱である「活用学習」と、「言葉の力」、そして「言語活動の充実」についてその意味を探り、概念整理を行う。

(1) 「活用学習」及び「言葉の力」

田中（2011）によれば、「活用学習」とは、「子どもが思考や表現の型を活用して、活用問題を解決した結果を個性的に表現する問題解決的な教科学習」である（p. 15）。

また、木原（2011）は、「活用型学力」を「ある対象に関して思考・判断・表現を一体的に展開できる能力」と定義して、「それは、今日的な意味での読解力に他ならない」と述べている（p. i）。そして、この「活用型学力」の育成を目指す授業を「活用型授業」と呼んでいる（p. v）。従って、これによれば、「活用学習」とは、思考力・判断力・表現力という「活用型学力」の育成に資する学習ともいえる。

では、「活用学習」にはどんな特徴があるのだろうか。

その特徴として、田中（2011）は次の3つを挙げている（pp. 28-38）。

1 7段階の活動ステップを踏むこと

活動ステップ① テキストとの出会い

活動ステップ② テキストの読み取り

活動ステップ③ 創作文の課題の決定

活動ステップ④ 作品構想づくり

活動ステップ⑤ 作品制作と改善

活動ステップ⑥ 作品の公表と社会参加

活動ステップ⑦ 創作表現の振り返り

2 物語の創作や説明文の創作などの創作表現を行うこと

3 フィンランド・メソッドの指導法を使うこと

① 読む・書く・話す・聞くという四言語活動を関連づけて取り入れる。

② 音声言語と文字言語を変換させながら表現をさせる。

③ 思考と表現の型を教えて個性的に表現させる。

④ 多様な表現活動をさせる（パペット劇、続き話づくり、書き換え、条件作文等）。

これらは、従来の国語科習得学習とは異なるものといえる。国語科活用学習は、言葉を言葉で学ばせるのではなく、子ども達が主体的・目的的に多様な言葉を活用する力を身につけることを目指しているといえよう。

しかし、多様な言葉を活用する力を身につけるとは、具体的には、どのような「言葉の力」を育てていく必要があるのだろうか。田中（2008）は、「言葉の力」を6つの力の領域で、合計20項目に整理している（pp. 4-5）。そして、このような多様な言葉の力の育成を意識的に活用学習の中で行うことが大切であると述べている。これらの項目を、本研究授業において多様に組み入れていく。

言葉の学習を行う教科としての国語科が、このような多様な言葉の力を育てることは、すべての教科・領域・時間の言語活動を充実させるために大変意義のあることである。さらに、本研究では、社会科と総合的な学習の時間の学習と国語科の活用学習を関連づけて、教科横断的なカリキュラム編成により、その効果を高めていく方法を開発し、検証することを目的とする。

では、「活用学習」にはどのような条件があるのだろうか。

田中（2011）は、次のような7つの条件を備えた学習を活用学習と呼んでいる（p. 19）。

＜活用学習の実践の7つの条件＞

条件① 活用問題の解決のために、どのような既習の知識・技能を活用すればよいかについて子どもたちに意識化させる。

条件② 問題解決のプロセスを見通して思考や表現の段取りを考えさせる。

条件③ 話型・文型・思考型など、考えたり表現したりするための手本や補助輪となるモデルを教えて、それを個性的に活用させる。

条件④ 複数の資料を比較して問題の解決や主題の表現をさせる。

条件⑤ 友だちと異なる思考結果や創作内容を比較検証させる。

条件⑥ 活用する型の項目例は、「活用事典」としてまとめたりカルタで整理して常時掲示したりして、いつでも意識化できるようにしておく。

条件⑦ 自分に活用力がついたかどうかを自己評価させて次の活用学習につなげる。

以上のように、このような授業づくりや指導方法の留意点を活かして活用学習に取り組む必要性が確認できる。特に、田中（2008及び2011）は、大阪府内および兵庫県内の公立小学校において、これら7つの条件を生かした国語科の先行的な授業実践を行い、その参与観察を通して授業の成果を検証している。本実践においても、これら7つの条件を生かした授業開発を行うことにする。

しかし、これらの条件や指導上の留意点を盛り込んで子どもに多様な力を付けるには、一単元による学習では難しいであろう。そこで、実際に、年間の指導内容を見通して、これらの条件や工夫が活かされるように教科横断的な年間カリキュラムを考えて、複数の単元を組み合わせた授業実践を計画していく。この点が、本授業開発の特徴である。

(2) 言語活動の充実

言葉の力を育てるために「言語活動」を行うことは従来から国語科の実践の中で行われてきたことであるが（水戸部，2011など）、現行の新しい学習指導要領が示す「言語活動の充実」という表現における「充実」という言葉の持つ意味を検討することが、活用学習の授業開発において必要である。

例えば、田中（2013）は、「言語活動の充実」の意味を次のように7つに整理している（p.91）。

- ① 型を活用し、言語を用いて思考・判断・表現をさせる。
- ② 自分の言葉で、個性的な表現をさせる。
- ③ カルタで活性化した豊かなイメージを活かして表現させる。
- ④ 活用を図る学習活動において、言語活動をしっかりと位置付ける。
- ⑤ 小集団で、書いた文章や話した言葉を練り上げる場面を設定する。
- ⑥ 評価規準を明示して、子どもたちに自己評価や相互評価を行わせる。
- ⑦ 論理・感性・意見・正義・価値等に基づく多様な言語活動を行わせる。

つまり、単に言語を使った活動を何回もすればよいというのではなく、上記の7つの点を組み合わせた言語活動の充実のさせ方を工夫していく必要があるというのである。

このような「言語活動の充実」に留意し、多様なフィンランド・メソッドを組み入れた授業展開を考えていくことにする。

4. フィンランド・メソッドに学ぶ教育方法と学力観の検討

フィンランドは、2000年及び2003年のOECDのPISA調査でPISA型読解力と呼ばれる学力が、参加国中で1位となった国である（国立教育政策研究所、2004）。そこで、フィンランドで行われている教育の特徴と、そこで開発され、北川（2005）及び田中（2008）によって効果が確認されてきた指導法をここで整理・概観してみることにする。

(1) フィンランドの教育の特徴

まず、田中（2008）は、フィンランド国語教科書の著者であるメルヴィ・ヴァレ先生の教室を訪問した経験からフィンランドの教育の特徴として次の5点を挙げている（pp. 9-10）。

- ① 授業が集団思考によって進められること。
- ② 自分の考えを自分の言葉で伝え合い、それを練り上げ高め合うことが奨励されていること。
- ③ 子ども達が授業規律と学習ルールをさすがしいほどに守り合うクラスになっていること。
- ④ 特に学力に課題のある子への個に応じた指導の充実。
- ⑤ 家庭学習の充実。

この中で特に、①の集団思考での練り上げや高め合い、そして②の自分の言葉で伝えることは、日本の子どもが苦手な分野であるので、本実践における授業開発において意識して取り入れたい部分である。

(2) フィンランド・メソッドとその学力観

次に、フィンランドで行われている、小・中学校での授業の特徴と学力向上につながる要因を関連文献から整理する。

『図説フィンランド・メソッド入門』（経済界）で北川（2005）は、次のような10点をフィンランド・メソッドに特有な指導法として整理している。

- ① フィンランドでは、「発想力」「論理力」「表現力」「批判思考力」「コミュニケーション力」を鍛えるための練習を子どものときから授業で沢山行っていて練習量が多い。
- ② マインドマップと同じ「カルタ」（と呼ばれる）を作る集団授業を行っている。このことによって、発想力や論理力が鍛えられる。発想力を高めることで、分析力、創造力を養っていく。
- ③ 「ミクシ？」（「なぜ？ どうして？」という意味のフィンランド語が授業で頻繁に使われる。基礎的な事柄でも「ミクシ？」を連発し、原因と結果がみんなにわかるようにしている。
- ④ 子どもは答えられないことが多いが気にせず聞き続ける。このことによって、「意見には理由をつける」ということを学ぶ。

- ⑤ いくつかの単語を用いて一番短い文を作文させる。このことによって、全ての単語を関連付けた文を書くことができ、またこれが、言葉を自由に使いこなす練習になり、最小の文字数を指定することで要約力もつくという。論理性があつて、なおかつ的確な表現力がないと相手に伝わらないことも学ぶ。
- ⑥ 型（フォーマット）に従った作文授業や、何がどうした、を考えるカルタと組み合わせた作文授業を行う。
- ⑦ 数人で各自の作文のよいところ、直したほうがよいところを批評しあう作文添削授業を行う。
- ⑧ 討論の授業を行い、相手がなぜそう思うのかを最後まで聞く。遮らない。
- ⑨ 討論の仕方を学ぶ。
- ⑩ 相手の目を見て話す習慣をつくる。

また、田中（2008）は、具体的に PISA 型読解力を育てる上で効果的なフィンランド・メソッドとして、

- ① カルタ
- ② 友だちとの相互評価による作品の構想や自分で作ったテキストの内容の練り上げ
- ③ 教科で学んだ「考える型」と「表現する型」を活用させること

を挙げている（pp. 29-30）。

特に、PISA 型読解力が高いフィンランドの授業では、いくつもの思考と表現の型を教えて、それに自分なりの創意工夫を加えて、具体的な問題解決過程で応用させる練習がよく行われているという。

日本では、教科でやり方（型）を教えても、それっきりで学校でそれらをもう一度活用させる機会は少ないし、まず、自分の考えを発言することを躊躇する子どもが多いのが現状で、ほとんどが一部の子どもの自己流の発言で学習がリードされてきた。思考の練り上げに時間を割くこと等は従来の指導ではあまりなされていないと考えられる。

参考にするべき点は他にもある。フィンランドでは、問題解決型の単元構成をするときには、次のような5つのポイントに配慮して活動配列を工夫している。こうした5つのフィンランド・メソッドによって、しっかりと PISA 型読解力を育てようとしているのである（田中，2008，p. 44）。

- ① 既存の知識・技能を活用させる問題解決的な学習を設定する
- ② 読む・書く・話す・聞くという四言語活動を関連づけて取り入れる
- ③ 情報の取り出し、解釈、熟考、評価を関連づけて取り入れる
- ④ 音声言語と文字言語を変換させながら表現をさせる
- ⑤ 個別学習、小集団学習、一斉学習を組み合わせる

以上の先行研究を参考にして、本研究での研究授業を設計し・実施することにした。

5. 「活用学習」の研究授業の実践分析

フィンランド・メソッド及び活用学習の意義や背景等を理論的に踏まえたうえで、次のような研究授業を行った。研究授業は、2011年度の大阪府A小学校4年生を対象にした実践である。授業者は、学級担任の蛸谷みさである。次にその詳細を記す。

(1) 研究授業の計画

研究課題を達成するために計画した、研究授業の大きな流れは次の通りである。

まず、国語科で「新聞の作り方」を学習する。そこで習得した新聞づくりの知識・技能を活用して、社会科で、それぞれのテーマや題材をもとに新聞を作らせることにより、新聞づくりの知識・技能を問題解決のために主体的に活用する力を育てる。

次に、国語科で「目的に合わせた説明文の書き方」を学習し、「資料を伴う説明文の書き方」を習得する。

そこで習得した知識・技能を活用する力を育てるために、さらに、伝えたいことに関して、子どもたちが「必要な資料を自ら作成」して集め、整理し、「ポスター発表」をする方法を国語科で学習するように単元を設計する。

さらに、それまで国語科で習得した、コミュニケーションに関わる諸能力を活用して、総合的な学習の時間で、「学級力新聞」を作成し、ポスター発表や広報活動を通して多くの人に発信する活動を行う、といった計画である。

以上の流れに沿って、以下の3つの活用学習のための新規単元（国語科、社会科および総合的な学習の時間）を開発した。この中で、「活用学習1」は社会科で行い、「活用学習2」は国語科で行った。また、「活用学習3」は、習得学習3及び習得学習4の発展として位置付け、総合的な学習の時間として実施する。社会科と総合的な学習の時間においても、活用学習を実施する計画とした理由は、国語科活用学習のみでなく、教科横断的なカリキュラム編成において活用学習を実施する方が、PISA型読解力の育成に一層効果的であると考えたからである。

習得学習1 4年 国語科単元「みんなで新聞を作ろう」（東京書籍）

活用学習1 4年 社会科単元「環境新聞づくり」

習得学習2 4年 国語科単元「目的に合わせて書こう」（東京書籍）

活用学習2 4年 国語科単元「健康で安全な校内生活」

習得学習3 4年 国語科単元「報告します、みんなの生活」（東京書籍）

習得学習4 4年 総合的な学習の時間単元「目指せ！ 向上！ 学級力！」

活用学習3 4年 総合的な学習の時間単元「学級力新聞を作ろう！」

次に、それぞれの研究授業を具体的に示す。

(2) 研究授業の実際と考察

2011 年度<2 学期>

○習得学習 1 4 年国語科単元「みんなで新聞を作ろう」(東京書籍)

1) 目標

領域 [書くこと] 調べたことを報告・紹介する文章にまとめる。

調べて分かったことや伝えたいことを整理して、新聞の形式にまとめる。(調査報告文)

2) 授業の実際

この教科書教材では、次の3点について学び、基礎的な新聞づくりの技能を習得させる。まず、新聞の構成や特徴と意義について学ぶ。具体的には、トップ記事・見出し・リード・記事・レイアウト・図や写真・漫画等の技法についてである。次に、文章の書き方について学ぶ。具体的には、段落・段組・割り付けの工夫・事実と意見を区別した表記の大切さやわかりやすい記事を書くポイントについてである。そして、3点目に、文章の内容構成上の留意点について学ぶ。具体的には、出来事の大事な事を落とさないように書くこと、数や名前を正しく書くこと、伝えたいことをより分かりやすくするために写真や図などの資料を入れること、読む人の興味をひくような見出しをつけること等である。

○活用学習 1 4 年社会科単元「環境新聞づくり」

社会科で、新聞の作り方・構成を活用して、B4 サイズの環境新聞や大きな模造紙大の壁新聞を作り、市の環境展に出品した。

このように、2 学期では、新聞の様式・構成・特徴・意義を国語科で学んだ後、実際に、社会科で環境新聞を作ったり、特別活動で日常を伝えるはがき新聞を作ったりして、新聞作成に関わる知識・技能の習得を確実なものにしていくようにした。新聞の書き方のおよその形式には慣れることができたといえる。しかし、伝える内容については、比較的単純なもので、平易な出来事の伝達にとどまるものが多かった。

2011 年度<3 学期>

○習得学習 2 4 年国語科単元「目的に合わせて書こう」(東京書籍)

1) 目標

領域 [書くこと] 情報を整理して書く。

伝えたいことに合わせて資料を選び、文書を書く。(調査報告文)

2) 授業の実際

この教科書教材では、「朝ご飯を食べることを呼びかける」ことを目的とした文章を書くときの工夫と、新聞やポスター、ノートなど、書くものの形式によって書く分量や書き方が違うことを学習する。そして、自分の目的に合わせて教科書に載っている3つの資料のうちどれを選んで書くかを考えさせるようになっている。基本的な導入として、モデルの文章の続きを書くようになっている。

しかし、この教科書教材の基本的な課題をこなすだけでは、活用型学力、つまり、場面が変わったときに対応できる力を育成できるだろうかという疑問が残る。そこで、次に示す「活用学習2」において、この教科書教材の学習の後に、実際に自分たちの学校の保健室が出している資料（10種類以上の表やグラフ）を見て、問題点を見つけ、「健康で安全な校内生活」というテーマで、多様な非連続的テキストの中から自分の伝えたい目的に合った資料を自分で選び、それを先の国語科で学習した「誰が読むのか」「何を伝えるのか」「何のために伝えるのか」等、書く目的を考えて、実際場面において自分で調査報告文を書く活動を入れるように、授業計画を工夫して、教科書教材を学習した後にいった。

○活用学習2 国語科「健康で安全な校内生活」

研究授業の計画における国語科の習得学習2で、教科書教材を用いて学習した後、今度は、実際の自校の保健室の利用状況調査のグラフや表等、10種類以上の資料の中から自分の伝えたい内容と目的に合った資料を選び、「校内生活の安全と健康」をテーマにした新聞を作成した。

具体的には、児童に提供した資料は、学年別利用人数、学年別のけがの種類・場所・頻度、月別利用人数、月別のけがの種類・場所・頻度等である。

その新聞をみんなに発表して、書き方に関する相互評価を行い、推敲に役立てた（新聞の推敲・アドバイス合戦）。子どもの活動の様子を、写真1・2・3で示す。

		
<p>写真1 活用学習2で新聞の下書きをもとに発表している様子</p>	<p>写真2 活用学習2で新聞の下書きをもとに相互評価している様子</p>	<p>写真3 活用学習2で新聞の文章を推敲した結果を発表している様子</p>

既習事項を使って、より多くの情報（グラフの形も多様であり、資料の目的も様々である）から、自分が本来知らせたい目的に応じた一番ふさわしい資料を自分で選び、それを使って、自分が伝えたいことがらをわかりやすく文章にして伝えるという作業は、習得した型（技能）を使って個性的に表現するというPISA型読解力を高める手だてとしてふさわしいものであった。子ども達にとって十数

種類もある資料の中から選ぶのは、難しいのではないかとはじめは心配したが、実際に行ってみると、実に念入りに、「健康で安全な校内生活をしよう」ということを呼びかける A4 サイズの手書き新聞を作ったのである。どれもバラエティに富んだ資料が使われている個性的な作品であった。つまり、「健康で安全な校内生活」を呼びかけるのに、実に子どもの数だけ多様な注意や視点が集まったのである。それだけに同じテーマを扱った新聞ではあっても、多様な視点から注意を促す力のある新聞になったというわけである。

伝える内容にふさわしい資料を自分で複数の中から選ぶという技能を一段とステップアップさせることができた。

次なる課題は、テーマや資料を与えられるのではなく、「自分から課題と思うことを見つけ、その課題を克服するための資料を自ら作って伝える」ということである。そこで、次の習得学習 3 と 4、そしてそこから「活用学習 3」につながる実践を行った。

○習得学習 3 4年国語科単元「報告します、みんなの生活」(東京書籍)

1) 目標

領域「話すこと・聞くこと」調べたことを説明・報告する。

アンケートをとって調べたことを、ポスターにまとめてグループで報告する(ポスター発表)。

2) 授業の実際

この教科書(東京書籍)では、「調べたことを整理して順序よく報告しましょう」という学習内容で、①調べることを決めよう、②アンケートを作ろう、③ポスターを作ろう、④ポスターの練習をしよう、⑤ポスター発表をしようという流れで学習をすることになっている。

ここで、ポスター発表までの一連の手順とポスター発表のポイント(話し方・聞き方・ポスターの見て欲しい部分の指し方等)を学習した。みんなの前に出て代表的なキーワードや資料を示して説明して質問を受け、それに答えていき理解を深める。こうした手順に沿った活動を一通り行うことでポスター発表のやり方は理解できたといえる。しかし、次なる課題は、やはり伝えたい中身である。この手順を踏んでポスター発表をする際に、子どもたちの生活を知らせることで、子ども達の生活改善に役立つものにしたと考えた。実際の生活に役立つことで、生きて働く力となるのではないかと判断したからである。そして、そうすることで、これまで学習してきた資料の作り方、使い方、生かし方、分析の仕方、話の仕方、比較の仕方等、思考力・判断力・表現力が総合的に働いて PISA 型読解力を高めることにつながると考えた。そこで、この学習の後に次のような習得学習 4 を総合的な学習の時間を使って行うことにした。

○習得学習 4 4年総合的な学習の時間単元「目指せ! 向上! 学級力!」

1) 目標

自分たちの学級の課題を自ら見つけ、その解決を図るために必要な資料を自分で作成し、学級力向

上新聞を作ることによって、学級の課題改善を促す力を身につける。

ここでいう「学級力」とは、「学び合う仲間としての学級をよりよくするために、子どもたちが常に支え合って目標にチャレンジし、友だちとの豊かな対話を創造して、規律を守り安心できる環境のもとで協調的な関係を創り出そうとする力」のことである（田中, 2013, p. 4）。簡便な学級力アンケートで子どもたちが自分のクラスの学級力を自己評価してチェックし、クラス全員の結果をレーダーチャート化したものを見て診断し、学級力を高めていく。学級力の5つの力とは、「目標にとりくむ力」「話をつなげる力」「協力する力」「安心を生み出す力」、そして「ルールを守る力」で、こうした5つの力を、学級での話し合いと取り組みを通して、子どもたちが協働して高めていこうというものである。その話し合い活動を行う時間を、スマイルタイムと呼んでいる。

2) 授業の実際

この単元では、上記国語科の習得学習1～3で習得した力を活用して、子どもたちによる課題設定、子どもたちによる必要な調査と資料作り、子どもたちによる振りかえりと学級新聞作り、そして、子どもたち自らの発信活動と学級改善を行った。

新聞作成の活動に関しても、今までの手書き新聞からさらに一步ステップアップさせて、コンピュータで作ることにした。また必要な資料は、自分でアンケートを作ったり、インタビューしたりして取材して適切なグラフや表にして作成させた。そして、つかんだ事実について、自分の考えを盛り込み、学級力向上に寄与する新聞を作ることを目指した。

○活用学習3 総合的な学習の時間「学級力新聞を作ろう！」

研究授業の計画における国語科の習得学習3で教科書教材を用いて学習した後、総合的な学習の時間において、「自分たちの学級をよりよくしよう」という目的のもと、学級力データを見て話し合ったことから、子どもたちそれぞれが「伝えたい内容」を決め、そのために必要な資料を考え、その調査項目を作り、実際に子どもたちが調査したデータをもとにして作成した資料を使ってわかりやすく伝える「学級力新聞」を作成した。この手順は次のようなものである。

- ① 学級力の課題をデータや事実に基づいて話し合う。
- ② 課題を見つけ、それを改善する目的に必要な資料を考える。
- ③ 調査手段を選択する。（アンケート・インタビュー・書物・インターネットなど）
- ④ 調査項目の作成（アンケート作り・インタビュー内容の決定）
- ⑤ 調査（予約の仕方・聞き方・御礼の言い方に留意）
- ⑥ 資料の整理（グラフ化や表の作成）
- ⑦ 習得した力を活用して、学級力新聞の下書き
- ⑧ 「伝える力 PRESS」（スズキ教育ソフト）を使って、コンピュータ新聞を作成
- ⑨ 子どもたちによる相互評価と振りかえりと子どもたち自らの発信活動
- ⑩ 学級力向上による学級での学習と生活の改善

この実践の中には、習得学習1で学習した「新聞作りの仕方」と、習得学習2で学習した「目的に合った資料を選んで目的に合った文章を、伝える相手を想定しながら書く」こと、さらに習得学習3で学習した「アンケートの作り方と留意点、ポスター発表の仕方と留意点」の学習に加え、場合によっては「アンケート以外の資料収集の仕方」を子どもの主体性をもとに付加するという多様な学習が含まれている。さらに、「インタビュー」の他にも、「書籍」や「インターネット」を活用した資料収集等の方法から、自分が伝えたい内容に「一番合った方法」を「選択」し、「複数の資料」を重ねながら「比較」したり「分析」したりして、文章にまとめて「書く」という内容も含んでいる。そして、自分たちが作成した新聞を多くの人に読んでもらったり、拡大してポスターの形で発表したりすることで、自らの学級（学校）生活の改善に役立てようとする試みであった。

子ども達は、非常に意欲的に学習した。これまで積み上げてきた新聞作りの技能を生かし、学級についてよく見つけ、課題を発見し、ふさわしい資料を考えて集め、分析し、データを判断して、課題解決方法を考えて友だちに呼びかける文章にして、新聞にした。この過程で、目的を持って物事を見つめ判断する力、資料を読み取る力、分析する力や書く力、比較する力、表現する力を必然的に使うこととなった。特にコンピュータ新聞のおかげで、いろいろなグラフ作りに興味を強く持ったことと、新聞作成の過程で相互評価セッションを行ったことで、推敲の力は勿論、友だちの良さや共に学習して高め合うことの価値を見いだすことができたことが大きな成果であり、副産物でもあった。この学級力向上の新聞作りをすること自体が、学級の子どもの目がお互いの成長をつぶさに観察することにもつながり、そのことでお互いを思いやることや認めることが増えてきたのである。これは、実際の子どもの達の新聞の記事の内容にも表れている。指導者としても「活用学習」のおもしろさを痛切に感じた実践であった。

課題として気になったことは、課題解決の方法として考えた事柄として出されるアイデアが懲罰的なものになりがちであったことである。発想の豊かさや広がり、もっとあってほしいと感じた。しかし、これが、4年生という年齢的な発達段階によるものなのか経験不足によるものなのか、発想力の乏しさによるものなのかは、今後調べてみたい課題である。

(3) 読解力アンケートの作成

活用学習の事前・事後での、読解力に関する子どもの態度や意識の違いや技能等の違いを分析し、この学習の成果と課題を捉える。活用学習の事前・事後の子どもの変化を把握する一つの手段として読解力アンケートを作成した。巻末の資料が、子ども達のPISA型読解力を調査するために作成した読解力アンケート(ver. 1.0)である。なお、作成にあたっては、田中(2007)を参考にした。その結果と考察については、以下に示す。

6. 本研究の成果と課題

(1) 研究授業の振り返り

2011年度の実践を振り返っての成果は、次のようなことである。

一つ目の成果は、国語科で習得した新聞作りの仕方を「はがき新聞」や「保健室のデータから分析した生活改善新聞」「学級力向上新聞」等で活用して、継続して新聞を作成したり、作る過程でステップを踏んでお互いに意見交換して発表したりしたことが功を奏して、グラフや写真等の資料を使って、わかりやすく発表したり、コンピュータを使って読みやすい作文を書いたり新聞を作ったりする児童が増えたことである。また、日常の学校生活改善をめあてとした「スマイルタイム」の回を重ねることによって、「賛成です・反対です・付け足します」という言葉や「なぜなら」という理由を述べて発言することが増え、話し合いがあまり途切れずにスムーズにできるようになったことも成果としてあげられる。急に指名されても何も発言せずに沈黙する児童はいなくなった。また、いろいろな教科学習や生活場面でのお互いの成長を振り返り、たたえることが多くなったこともあげられる。4月当初にあった、誰かを中傷するような言葉は聞かれなくなった。

一方、課題としては、伝える時の「相手意識」を育てる必要があるということである。学習したことを、同じクラスの仲間の中では言わずともわかる部分もあるが、共通理解できていない異集団や異年齢の人にもわかるように伝えるには、工夫が必要である。このような伝える相手意識を育てる学習経験が本年度の実践研究においては不足していたと思われる。

(2) アンケート調査結果の分析と考察

2011年度に、子どもに自分の読解力に関する状況を答えてもらう24項目からなる読解力アンケート（【資料】を参照）を作成した。そして、担当した4年生のクラスの児童31名に読解力アンケートを行った（1回目は2011年10月、2回目は2012年3月に実施）。その結果をグラフにしたものが、図1である。

これによると、ほとんど全ての質問項目で児童による肯定的な回答が増えていた。特に、質問項目の1. 11. 14. 21において大きく伸びていた。つまり、「グラフや写真などの資料を使って、わかりやすく発表するようにしています。」「コンピュータを使って、読みやすい作文を書いたり新聞を作ったりしています。」「友だちの話に賛成・反対・つけたしと、つなげるように発言しています。」「『なぜなら』や『たとえば』という言葉を使って、作文を書いたり発表したりしています。」という事柄が以前よりよくできるようになったと感じている子どもが多いということである。

一方、あまり大きな変化が表れていないものに、質問項目22の「相手のことを考えて、わかりやすい文章を書いたり、話をしたりしています。」が挙げられる。これは、これらの学習が、まだ、日常的に相手のことを考えて伝えるという意識を育てるまでには至っていないということを表しているといえよう。この他にも、4. 24. 15. 16. 20. 23の項目で進歩の歩幅が小さいことが伺える。それ

は、「作文を書いているときに、新しく習った漢字や言葉を使うようにしている」ことや「こんな文章を書いてみたい、こんなふうに発表してみたいという目標をもっている」ことや「資料を見ながら、『なぜだろう』『ふしぎだな』と考える」ことや「学校で学んだことを、新聞やポスターにして、お家の人や近所の人に伝えている」ことや「学習をしてさらに知りたいことを、自分なりに調べてみる」ということや「国語科で学んだ文章の書き方や話し方を、他の教科でも自分なりに使うようにしている」ということがまだ少ないということである。

従って、今後は、「学習したことを教科や場面は違っても日常的に活かすという体験を多くさせ、その意義を体感させること」「目標となるような、よい文章モデルや発表モデルをさらに示していくこと」「資料を比較したり分析したりして自分の感想や考えをもつこと」「自学自習の推進」に特に留意して意図的に学習計画に組み入れていくことにしたい。

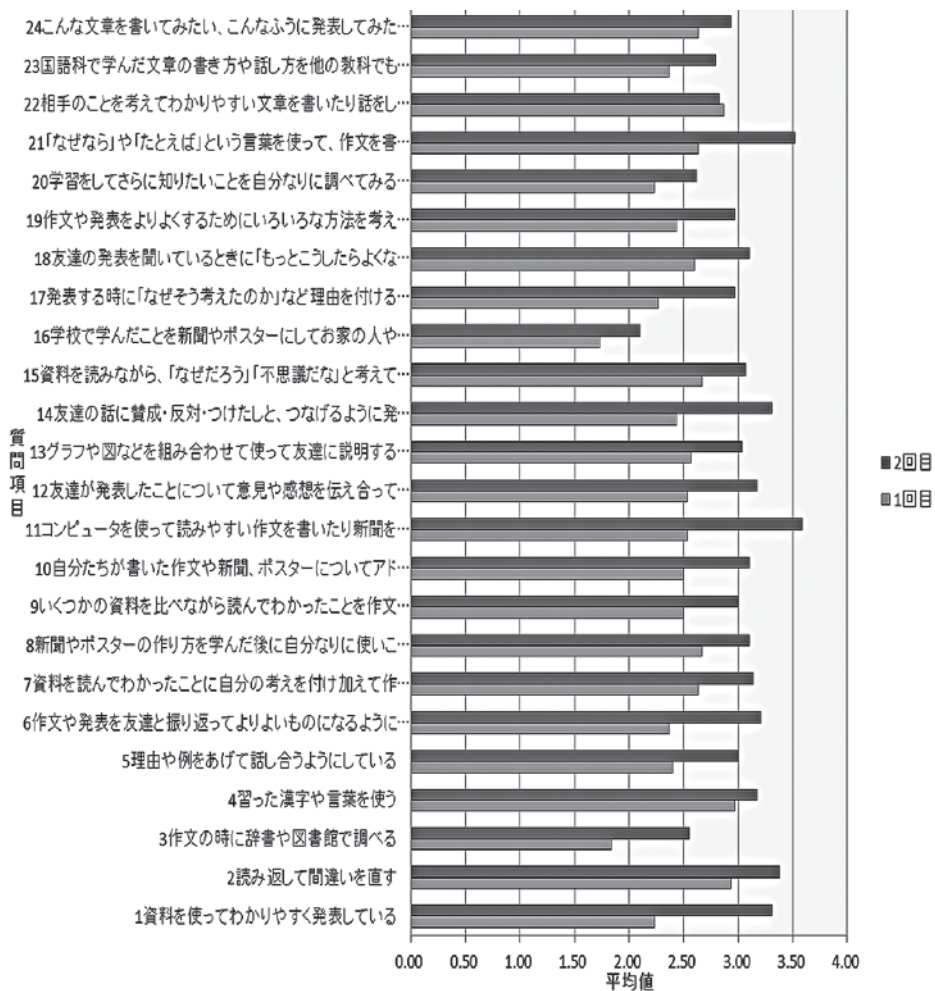


図1 第1年次(4年生)活用学習実践前後の読解力アンケートの結果

また、アンケート項目において、実際に行動面として表れる項目、例えば、「やっている・やっていない」で判断できる項目においては、子どもたちは自己診断をしやすいが、態度や心がけ等、精神面の項目においては、自信を持って答えにくいのではないかと思われた。そこで、今後の課題として、アンケート項目の文章をさらにわかりやすく修正し、行動面として明らかに答えやすい項目を増やすなど、前年度の読解力アンケートを改訂して用いることにしたい。

(3) 第2年次の実践研究（2012年度）の構想と課題

2011年度は、国語科で習得した内容を社会科と総合的な学習の時間において活用させることにより、子どもたちは意欲的に学習に取り組み、先に述べたような成果を得たが、次年度は、前年度の課題を踏まえて、さらに「言語活動の充実」の工夫をより加えた実践にしていくことに留意したい。さらに、コミュニケーション力を育成するためにどのようなことが積み重ねとして有効なのか、「言語活動の充実」という言葉の意味を考え、実践していきたい。

総括すると、2011年度の研究授業と読解力アンケート結果の反省に基づき、2012年度は以下の4点に重点をおいた実践研究を実施したい。

- ① 学習したことを教科や場面は違っても日常的に活かすという体験を多くさせ、その意義を体感させること
- ② 目標となるような、よい文章モデルや発表モデル（型）をさらにわかりやすく示していくこと
- ③ 資料を比較したり分析したりして自分の感想や考えをもつこと
- ④ 「自学自習の推進」に特に留意して意図的に学習計画に組み入れていくこと

以上の点に留意して、新しい年度の実践研究に取り組んでいきたい。

なお、2011年度の読解力アンケートの分析においては、統計的な手法を用いた厳密な考察を行うことができなかった。この点も反省点として、次の研究課題としたい。

【引用文献】

- 北川達夫著『図解フィンランド・メソッド入門』経済界、2005年
木原俊行著『活用型学力を育てる授業づくり』ミネルヴァ書房、2011年
国立教育政策研究所編著『生きるための知識と技能〈2〉—OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2003年調査国際結果報告書』ぎょうせい、2004年
小森茂著『生きた言葉の力を身に付ける新しい国語科授業の実際 小学校4年』東洋館出版、2002年
田中博之監修『読解力を育てる総合教育力の向上に向けて—学力向上のための基本調査2006より—』ベネッセ教育研究開発センター、2007年
田中博之著『フィンランド・メソッドの学力革命』明治図書出版、2008年
田中博之編著『言葉の力を育てる活用学習』ミネルヴァ書房、2011年
田中博之「言語活動の充実とは何か」『教職研修』2月号、教育開発研究所、2013年、pp.90-94
二瓶弘行編著『クラスすべての子どもに「生きて働く言葉の力」を育む国語授業』東洋館出版、2009年
水戸部修治編著『小学校国語科言語活動パーフェクトガイド3・4』明治図書出版、2011年

【参考文献】

メルヴィ・ヴァレ, リトバ・コスキバー, マルック・トリマン著, 北川達夫訳『5つの基本が学べるフィンランド国語教科書』経済界, 2005年

【付記】

本文中では、「習得」と「活用」という用語を、学習指導要領における考え方は少し異なる方法で用いている。具体的には、p. 47において、「習得学習4」及び「活用学習3」の単元に、それぞれ総合的な学習の時間の授業実践をあてているが、学習指導要領においては、「習得」も「活用」も教科指導における児童生徒の学習原理であるために、概念定義が異なっている。本稿では、総合的な学習の時間においても、当該の知識・技能が児童生徒にとってほぼ新出事項であれば「習得」と位置付け、そして、習得した知識・技能を応用して問題解決的な学習に生かしている場合には「活用」と位置付けている。したがって、本稿では、「習得」と「活用」という概念は、学習指導要領のような「領域固有」の概念ではなく、児童生徒の思考操作の機能によって使い分けていることに留意されたい。

【資料】 読解力アンケートの項目

- 1 グラフや写真などの資料を使って、わかりやすく発表するようにしています。
- 2 文章を書いたときに、かならず読み返して、まちがいを直しています。
- 3 作文を書いているときに、国語辞典を引いたり図書館で調べたりしています。
- 4 作文を書いているときに、新しく習った漢字や言葉を使うようにしています。
- 5 理由を言ったり、例をあげたりして、友だちと話し合うようにしています。
- 6 作文や発表を友だちとふりかえって、よりよいものになるようにしています。
- 7 資料を読んでわかったことに、自分の考えを付け加えて作文を書くようにしています。
- 8 新聞やポスターの作り方を学んだあとに、自分なりに使いこなそうとしています。
- 9 いくつかの資料を比べながら読んで、わかったことを作文に書いています。
- 10 自分たちが書いた作文や新聞、ポスターについて、アドバイスをし合っています。
- 11 コンピュータを使って、読みやすい作文を書いたり新聞を作ったりしています。
- 12 友だちが発表したことについて、意見や感想を伝え合っています。
- 13 グラフや図などを組み合わせて使って、友だちに説明するようにしています。
- 14 友だちの話に賛成・反対・つけたしと、つなげるように発言しています。
- 15 資料を読みながら、「なぜだろう」「ふしぎだな」と考えています。
- 16 学校で学んだことを、新聞やポスターにして、お家の人や近所の人に伝えています。
- 17 発表するときに、「なぜそう考えたのか」など、理由を付けるようにしています。
- 18 友だちの発表を聞いているときに、「こうしたらもっとよくなる」と考えています。
- 19 作文や発表をよりよくするために、いろいろな方法を考えるようにしています。
- 20 学習をしてさらに知りたいことを、自分なりに調べてみるがあります。
- 21 「なぜなら」や「たとえば」という言葉を使って、作文を書いたり発表したりしています。
- 22 相手のことを考えて、わかりやすい文章を書いたり話をしたりしています。
- 23 国語科で学んだ文章の書き方や話し方を、他の教科でも自分なりに使うようにしています。
- 24 こんな文章を書いてみたい、こんなふうに発表してみたいという目標をもっています。